

2021年10月17日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 22 : 2～6、ルカによる福音書 18 : 31～34

「みな実現する」

【前奏】

【招詞】 ローマの信徒への手紙 12 : 1

【祈祷】 司式長老

【聖書】 詩編 22 : 2～6、ルカによる福音書 18 : 31～34

【説教】 「みな実現する」

<実現するために>

先週の聖書箇所には、イエスさまの、このような御言葉がありました。

「人間にはできないことも、神にはできる」。

人間にはできないこと。それは、自分で救いを得ることです。

イエスさまは、わたしたち人間が、乳飲み子のようにまったく無力で、与えられたものを受けことでしか生きられない存在であること。それなのに、わたしたちは、自分が手にしているもの、持っているもの、頼りにしているものを手放すことが、本当に困難であること。そのことを教えられました。

わたしたちは、見えない神さまの恵みよりも、自分が手にしているもの、自分の力で手に入れたものの方が、よっぽど確かで、現実的で、確実なもののように思ってしまうのです。

その思いの根本には、わたしたちが、造り主である神さまを、まことの神としていないこと。神さまにのみ信頼する、ということが出来ていないこと。神さま以外のもの、つまり偶像に心を向けて、依り頼んでいること。そんな、神さまに対する、深刻な罪があります。

しかし、イエスさまは言って下さいました。「神にはできる」。

神さまには、人間に救いを得させることがお出来になります。わたしたちの心を神さまに向けさせ、虚しいものに依り頼むのをやめさせ、神さまが与えて下さる救いを受け取ることが出来るように。神さまへと心に向けることが出来るように。神さまと共に生きることを喜ぶ者となることが出来るように。

神さまには、わたしたちを罪から解放し、神さまと共に生きる新しい命に、与らせることがお出来になるのです。

「神にはできる」。そう言って下さった後、イエスさまは今日の聖書箇所の御言葉を、弟子の十二人を呼び寄せて言われました。

「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな

実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

イエスさまは、この「神にはできる」と言われたこと。わたしたちを罪から解放し、神の国に招き入れ、永遠の命を与えさせること。それを、これから成し遂げて下さるために、エルサレムへ向かって、苦しみを受け、殺され、そして復活する、と告げられたのです。

神にはできる。イエスさまがして下さる。そう言って下さるのは、神さまがわたしたちを救いたいと、共に生きる者にしたいと、そう望んで下さっているからです。

神さまは、それほどまでに、お造りになったわたしたちを愛し、憐れみ、慈しんで下さっています。そのわたしたちを、救いに与らせるために、永遠の命を与えるために、神さまは、どのようなことでもお出来になる。わたしたちのために、何でもして下さる、というのです。

ですから、神さまは御自分の愛する御子を、この世に遣わされました。

そして、その神さまの御心を実現するために来られたイエスさまは、わたしたちのために、神の御子でありながら、弱く無力で小さな人間と、まったく同じになって下さり、あらゆる苦しみを引き受けて下さり、その命さえも惜しみなく与えて下さる。ご自分の苦しみと死を引き換えにしても、わたしたちを罪から解放し、滅びから救い、生かして下さる。そんなことまでお出来になる、というのです。

そして、そのことを実現するため、イエスさまはエルサレムへと向かっておられるのです。

<旧約聖書の実現>

さて、実はイエスさまが、ご自分の受難と死、そして復活のことを予告されたのは、ルカによる福音書では、これで三回目です。一回目と二回目の予告は、9章で告げられていました。そして、三回目の今回は、これまでよりも一番詳しく、その内容が語られています。

このイエスさまの受難と復活の予告は、他の福音書、マタイとマルコにも記されています。しかし、特にルカだけが強調してここで伝えていることの一つは、「人の子について預言者が書いたことはみな実現する」ということです。

はっきり言って、神の子、神から遣わされたメシアが、異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられ、鞭打ってから殺される。こんなことは、とんだ常識外れなことであり、誰も信じる事が出来ないことです。あってはならないことです。

しかし、このような、あってはならないと人が思うような仕方で、神さまは救いの御業を行なわれます。救いは、わたしたちの願うような仕方、理想通りの仕方で、行なわれるのではありません。救いは、わたしたちの思いなど遥かに超えて、神さまの仕方で、成し遂げられるのです。

ですから、これからイエスさまの身に起こることは、人には受け入れがたいような、信じられないようなことですが、確かに、神さまのご計画に従って、神さまの御心に従って起こ

ることなのです。

イエスさまは言われました。「預言者が書いたことはみな実現する。」

「預言者が書いたこと」とは「旧約聖書」のことです。つまり、イエスさまがこれから成し遂げられることは、神さまが預言者を通して、既に語られていたご計画の実現に他ならない。神さまのご意志によって、計画され、実現することである、ということなのです。

<乱暴な仕打ち>

そして、もう一つのルカの特徴は、「異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す」というところで、「乱暴な仕打ちを受け」という、他の福音書にはない言葉を付け加えたことです。ここでルカは、人間の罪を、わたしたちの罪を、深く見つめようとしているのかも知れません。

「乱暴な仕打ちを受ける」。これは、もとの単語は「傲慢」という意味の言葉です。動詞になると、「乱暴を働く、侮辱を加える、はずかしめる」。人を指す言葉として使うと、「暴力を振るう者、人を侮る者、不遜な者」という意味になります。

つまり、イエスさまは、傲慢な人間によって、乱暴な仕打ちをお受けになった。人間の傲慢さ、思い上がり、神の御子イエスさまに侮辱を与え、乱暴し、唾をかけ、鞭打って、最期には死に追いやることになった、ということなのです。

傲慢。思い上がり。自分が自分の力で生きていると思うこと。自分には出来ると思っていること。救いは自分の力で得られる。神さまに頼らなくてもやっていけると思っていること。神さまの思いに従うよりも、自分の思いや願に従うことを優先すること。

神さまの御前で、わたしたちの思い、振る舞い、それは自覚していても、していなくても、神さまに対して傲慢な、不遜な態度であり、とんだ思い上がりなのです。神さまを中心とせず、神さまに心を向けず、自己中心的になり、自分のために心を砕いているのです。

それは、わたしたちや世界をお造りになり、守り、導いておられる神さまを、侮辱し、あるいは無視し、唾をはくようなことに他なりません。

そうして、わたしたちは神さまからどんどん遠ざかり、離れて行き、自分の正しさを貫くために、自分を自分で守るために、頑なになり、人を出し抜こうとし、人と比べて安心したり、不安になったり、傷ついたり、傷つけたりしながら、滅びへ向かっているのです。

わたしたちは、もうそこから自分で帰ってくる事が出来ません。人間にはできない。わたしたちの罪は、あまりに深刻なのです。傲慢をやめようと思っても、それは見せかけの謙遜にしかありません。神さまに頼る者になろうと思っても、自分が大事にし、頼りにしているものを、手放すことが出来ません。人間にはできない。

だから、イエスさまが、このわたしたちの罪を。傲慢でありながら、どうしようもなくなって、人を攻撃したり、侮ったり、妬んだり、絶望したりしなければならない、この苦しみ

の根源の罪を。すべて、ご自分の十字架の上に引き受けて下さったのです。

神の御子であるイエスさまを十字架に付けたのは。裏切って引き渡し、侮辱し、乱暴な仕打ちをし、唾をかけ、鞭打って殺したのは。あらゆる人間の傲慢であり、罪です。そしてそれは、他でもない、わたしたちのことなのです。

わたしのゆえに、神の御子があれほど苦しまれた。痛めつけられた。辱められた。わたしたちは神さまに対して、そのようなことをしてしまう者なのです。

一体、こんなわたしたちの、「だれが救われるのだろうか」(26節)。

神さまが、憐れみ深い方でなければ、わたしたちを愛して下さる方でなければ、だれも、救われません。

でも、神さまは、愛と憐れみに満ちたお方です。そして、御子イエスさまを遣わして下さった。そして、イエスさまは、わたしたちの、こんなに深刻で、どうしようもない罪を受け止めて下さったのです。

それが、イエスさまの十字架の苦しみと死に、示されていることです。

そして、イエスさまは、ご自分の流された血によって、わたしたちの罪を清めて下さる。ご自分の命によって、わたしたちの罪を贖って下さる。そのような仕方で、救いを与えて下さるのです。

これが、神さまの御心であり、旧約聖書から示されていた、神さまの救いのご計画です。救い主が苦しみを受けること。それは、特にイザヤ書にはっきりと示されています。

また、今日お読みした詩編 22 編 2 節、「わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか」。これは、イエスさまが十字架の上で叫ばれた言葉です。最も究極的な人間の苦しみの叫びを、神さまから遠く離れてしまった、罪の最果て苦しみを、十字架の上で神の御子イエスさまが叫ばれた。そのことによって、わたしたちの罪の苦しみを、このお方が確かに引き受け、担って下さったことを知らされるのです。

<復活>

そして神さまは、この方の十字架の苦しみと死が、まことに人の罪と死を打ち破るものであること、滅びに至る罪人に、永遠の命と復活への道を切り拓くものであることが明らかにするために、イエスさまを死者の中から復活させられたのです。

救いの御業は、イエスさまの十字架の苦しみと死、そして復活によってこそ、まことに実現したのです。

すべての人の罪が、神の御子イエスさまを死に迫りやりました。人の傲慢が、横暴が、罪が、この方を打ち負かし、勝利しているかのように見えました。今のわたしたちの世界も、目に見えるところにおいては、未だに人の罪が勝っているかのように映るかも知れません。

しかし、神の力は、それを打ち破ることがお出来になります。勝利したのは、神さまの力です。イエスさまがわたしたちの全ての罪を十字架によって担い、解放して下さいました。

そして、罪の贖いを成し遂げ、滅びの死を打ち破り、神のご支配が確かに打ち立てられました。それは、イエスさまの復活によってこそ、明らかにされたのです。

このイエスさまの復活がなければ、わたしたちは、罪を贖い、死に勝利して下さる神の力が本当かどうか信じるための縁（よすが）が、無かったのではないのでしょうか。

わたしたちは復活によってこそ、イエスさまの十字架の苦しみと死が、わたしたちの罪と死を打ち破るものであったこと。この方を通して永遠の命と復活に与ることが出来るということ。旧約聖書に告げられた救いのご計画が、まことに実現したのだと、知ることが出来るのです。

<救いを知る>

さて、イエスさまが受難と復活の予告をされた時、34節にはこうありました。

「十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。」

彼らはこの時、イエスさまが語られたことが、何も分からなかった、とあります。それは、理解力が悪いとか、勘が鈍いとか、そういう問題ではありません。十二弟子はこの時、まだイエスさまの十字架も、復活も、何も経験していません。そして「彼らにはこの言葉の意味が隠されていた」とあるように、それはまだ、知らされる時ではなかったのです。

では、彼らがイエスさまの言われたことの意味を理解できたのは、いつなのでしょう。

十字架の時、イエスさまは言われた通りに、引き渡され、受難をお受けになりました。でも、この時の弟子たちは、それぞれ不安や恐怖に取りつかれ、逃げ去ったり、隠れたりしてしまいましたし、イエスさまが死んで葬られてからも、恐ろしくて、集まって家に閉じこもっていました。

イエスさまの十字架の死がショック過ぎて、余りに強烈過ぎて、彼らはイエスさまが「復活」について語られたことを思い出すことさえなかったかも知れません。この時、彼らが希望を持っている様子は、まったく見受けられないのです。

そしてその後、三日目に甦られたイエスさまが、弟子たちと出会って下さいます。

ところが、復活なさったイエスさまと出会っても、まだ弟子たちは分からなかったり、疑ったりしているのです。

しかし、復活のイエスさまは、ルカによる福音書の終わりの方や、使徒言行録の初めの方に出て来ますが、しばらく弟子たちと共にいて、旧約聖書を説き明かして下さったり、神の国のことを教えて下さったりします。そして、天に上げられ、聖霊が弟子たちに降ります。

それからです。弟子たちは、イエスさまの十字架と復活の出来事を、救いの知らせとして、世界中に宣べ伝え始めるのです。

つまり、弟子たちが、わたしたちが、イエスさまが成し遂げて下さった救いの御業が、本

当に自分の罪のためであった。自分の救いのためであった。自分を神の国に招き入れるための十字架であった。そのことが分かるのは、復活し、生きておられるイエスさまが出会って下さり、聖霊なる神さまのお働きのうちに、共にいて下さることによってなのです。

聖書の御言葉を通して、聖霊によって、わたしたちは生きておられる、復活のイエスさまと出会います。そうして、御言葉を説き明かされ、十字架と復活の意味を知らされていく。この神の御子が、まことにわたしの救い主であり、まことにわたしと共にいて下さる方であると分かっていく。

そうして、わたしたちの目を隠していた覆いが外され、目が開かれ、わたしたちは、はっきりと生きておられるイエスさまを、救いの恵みを、見つめる者とされるのです。

悔い改めの心を与えられ、神さまの恵みを受け取る者とされるのです。

信仰の目が開かれた時。わたしたちは、世を支配しているかのように見える、目にはっきりと映る人間の罪の現実よりも、目には見えないけれども、イエスさまが成し遂げて下さり、確かに実現している神さまの恵みこそが、まことに世界を支配しているのだと信じる事が出来るようになります。

しかもイエスさまは、すぐに世のものに目を奪われ、動揺する弱いわたしたちのために、目に見える救いの「しるし」を与えて下さいました。

その一つが、洗礼です。そして、このイエスさまに一つに結ばれ、救われていること。イエスさまの裂かれた肉と流された血によって、わたしたちは罪を清められ、イエスさまの復活の命に与って生かされていること。そのことを確かに覚え続けるために、目に見えるパンと杯を用いる、聖餐の恵みが備えられているのです。

今、今日ここで、イエスさまの十字架と復活が告げ知らされていること。そして、聖餐が執り行われること。それこそ、イエスさまが復活なされ、まことに生きておられるという確かな証拠であり、聖霊なる神さまが働いて下さっている確かな現実です。

聖書に語られたことは、みな実現します。人間にはできないことも、神にはお出来になります。わたしたちは罪を赦され、復活と永遠の命に与ることが出来ます。神の国に迎えられます。神の子として、神さまと親しく交わることが出来ます。

そして、終わりの日には、イエスさまが再び来られて、神の国を完成させて下さる。わたしたちの救いを完成させて下さり、目の涙をことごとくぬぐい取って下さる。死はなく、悲しみも嘆きもない。すべてが新しくされる。そう約束されています。

わたしたちは、悔い改めをもってイエスさまの十字架の御前に立ち、また喜びをもって復活のイエスさまと共にありつつ、神さまの恵みの現実の中を、今日も、明日も、終わりの日に至るまで、歩んでいきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの憐れみに満ちたご計画によって、旧約聖書に語られた通り、イエスさまが十字架と復活によって、救いの御業を実現して下さいましたことを感謝いたします。

イエスさまの十字架の御苦しみを思う時、わたしたちは自分の罪の深刻さを見つめさせられます。しかし、イエスさまはそれらをすべて覆って下さり、贖いを成し遂げ、死に打ち勝ち、新しい命へと招いて下さいました。どうか、神さまの御許に立ち帰らせて下さい。救いの恵みに与らせて下さい。

今日は聖餐の恵みに与ります。聖霊の導きによって、イエスさまの十字架上で裂かれた体と流された血を覚え、深く悔い改めると共に、イエスさまによって養い、生かされている、その恵みを確かにさせ、わたしたちの信仰を励まして下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 298 「ああ主は誰がため」

【信仰告白】 使徒信条

【聖餐】

【讃美歌】 81 「主の食卓を囲み」

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン